

日本財団補助金による

1996年度財団法人日中医学協会助成報告書

－学術交流に対する助成－

年 月 日

財団法人 日中医学協会
理事長 中島章殿

報告者氏名 三村 悟 郎 (印)
所属機関名 学校法人尚絅学園 尚絅短期大学
職 名 学 長 年齢 _____ 才
所 在 地 〒 862 熊本市九品寺2-6-78
電話 096-362-2011 内線 307

◎添付書類：講演集・シンポジウム写真等学会に関する資料

学会・学術交流の名称 第5回日中友好糖尿病シンポジウム
テ マ 糖尿病の疫学、成因、治療、教育
主催団体 第5回日中友好糖尿病シンポジウム委員会、中華医学会
代表者 三村 悟 郎
期間・開催地 1996年9月6日、7日
招へい・派遣目的 本シンポジウムは昭和62年（1987年）に北京市において開催し、これを契機として日中間に多くの医学シンポジウムが開催されるようになった。第2回を福岡市、第3回を上海市、第4回を横浜市において開催し、両国間の糖尿病の研究推進および日中の親善促進に果たした役割は大である。今回はシンポジウム開催10年目であり、両国の研究の交流と親善を深めることが目的である。

I. 招へい・派遣研究者 人数 3 人（別紙） Goro Mimura, Kaichi Kida,
1) 氏名（漢字） 三村悟郎, 貴田嘉一, 村上啓治 英文名 Keiji Murakami 男・女
所属機関、職名 _____ 生年月日 _____
所在地 _____
電話 _____ 内線 _____
研究課題 _____

II. 滞 在 期 間 自 1996 年 9 月 3 日 至 1996 年 9 月 8 日 (6 日間)
1996 年 9 月 4 日 至 1996 年 9 月 8 日 (5 日間)

III. 助成金の使途内訳
助成金額 500,000 円
交通費 585,840 円 宿泊費 _____ 円 食費 _____ 円
雑費 _____ 円 他 _____ 円

・招聘・派遣研究者記入欄が不足の場合は別紙に追加添付して下さい。

IV. 主な滞在日程

	9月3日	4日	5日	6日	7日	8日
貴田 嘉一	西安到着	シンポジウム準備	シンポジウム		中華医学会と第6回シンポジウム打合せ	帰国
三村 悟郎		西安到着	シンポジウム準備			
村上 啓治		西安到着	シンポジウム準備			

貴田が9月3日に西安到着、シンポジウムの準備、その他中華医学会と打合せ、資料不足の場合、三村、村上が持参する予定とした。5日、6日はシンポジウム開催、7日はシンポジウムの後片付けと中華医学会、中国糖尿病学会の委員と次回第6回のシンポジウム開催について合議した。開催年は1999年（2年間隔で開催することとした）、日本で開催することとした。日本側代表世話人は三村、第6回シンポジウム開催責任者は貴田とすることとなり、8日帰国した。

V. 学術交流報告

中国糖尿病学会の第7回の学術集会在9月1日～3日西安市で開催され、ひきつづいて第5回のシンポジウムが5日、6日の両日ハイヤットホテルで開催した。開会式は中国糖尿病学会の朱禧星会長、中華医学会の尚粹仁副会長、

秘書長の挨拶および日本側から三村代表世話人の挨拶が行なわれ、シンポジウムが開催された。

特別講演は日本側から貴田嘉一教授、野中共平教授、中国側からXixing Ehu, Xian-Ren Pan教授によって行われた

が講演内容は日本、中国の糖尿病の成因についての研究成果および日本の糖尿病治療の現状、中国の糖尿病の疫学について格調のある最新の研究成果が発表され、極めて有意義な特別講演であった。招待講演として日本側から竹

田亮祐名誉教授から興味深い肝臓病についての講演が行なわれた。一般演題は日本側から30題、中国側から31題（うち2題は欠）であり、ポスターは中国側から31題であった。本シンポジウムは発表は英語で行ない、質疑応答

は日中両国語を用いたが、今回のシンポジウムの講演内容は糖尿病の基礎的研究と臨床研究であり、中国の研究水準の向上が顕著に認められた。また両国の研究者による質疑応答が今回は極めて活発であり、大市にシンポジウム

の終了時間がおくれた。更に今回の学術交流を通じて両国間の親善関係がより強固となり、両国の研究者の交流の輪が更に広まったことも今回のシンポジウムの成果の一つといえる。